慶應義塾大学
教養研究センター

https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1
Tel 045-566-1151 Fax 045-566-1102
Mail toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

単位認定

教養研究センター設置科目

アカデミック・スキルズⅠⅡ	Academic Skills
生命の教養学	The Liberal Arts of Life
日吉学	Hiyoshi-ology
エンターテインメントビジネス論	Entertainment Business
身体知	Learning Through Affective Experience and Active Participation
身体知・音楽Ⅱ	Learning Through Affective Experience and Active Participation: Historical Performance Practice of Music
ゲーム学	Game studies

いま、最先端の学問は「教養」かもしれない。

2023年度ガイダンス
（オンデマンド配信・要keio.jp認証）

https://keio.box.com/v/lib-artsguidance

〈配信期間〉
2023年4月1日(土)~14日(金)（予定）

「教養」のすゝめ

大学は専門教育と教養教育の両輪で成り立ちます。

なぜなら、複雑な現実社会の中で専門的知識はそのまま役立つものではないからです。

専門的知識は応用しないと、現実には、はまりません。

応用するために必要なもの。

それが教養です。

さらに専門教育は限られた一分野に徹するから専門。

世の中を生きていくためには専門だけでは偏ります。

そこでも教養は不可欠なのです。

福澤諭吉先生も言っています。

「決して字を読むことのみを勧むるに非ず」

『学問のすゝめ』の中の言葉です。書斎で狭い学問をしているだけでは駄目だということです。

社会的・実践的に、からだを動かして学ぶことまで含めた、広い学問の必要性を述べた言葉です。

福澤先生による「教養のすゝめ」と解してよいでしょう。

教養研究センターは慶應義塾における教養教育の力強い担い手です。

様々な授業を設置して、学部のしきりにとらわれない、教養教育の実践に取り組んでいます。

ぜひ、ガイダンスで情報を得て、履修の参考にしていただければと思います。

Guidance

2023年度教養研究センター設置科目ガイダンス

（オンデマンド配信・要keio.jp認証）

https://keio.box.com/v/lib-artsguidance

配信期間 2023年4月1日(土)～14日(金)(予定)

教養研究センターの設置科目、履修申告の手続き方法や幅広い活動について紹介します。
履修希望者は必ずご覧ください。(要keio.jp認証)

※keio.jp以外のGoogleアカウントにログインしているとアクセスできません。
一度全てのアカウントからログアウトし、ブラウザを落としてから再度keio.jpにログインし直してください。
必要な場合は、Boxアプリをダウンロードしてください。

担当教員からのメッセージ

アカデミック・スキルズⅠⅡ

Academic Skills

レポートと論文の違い。
プレゼンテーションの仕方を基本から学びます。

論文の書き方、プレゼンテーションの仕方を徹底指導。滅多にない授業です。大学の授業ではレポートを書く機会が増えます。
3、4年生になると論文の執筆を求められることもあるでしょう。
では、レポートと論文はどう違うのか。さらに内容を口頭で発表するときはどうするか。アカデミック・スキルズはそのスキルをみなさんに伝授します。

法学部教授 片山杜秀

身体知

Learning Through Affective Experience and Active Participation

言葉と体を通して
全く新しい自分に出会ってみよう。

普段皆さんが読んでいる物語や小説。
それを声に出して読んでみたら・・・他者と一緒に議論してみたら・・・絵や歌、体を使って表現してみたら・・・。
ふだん私たちが「学び」と思っていることを全く異なる方法で「体感」してみる授業です。

法学部教授 横山千晶

生命の教養学

The Liberal Arts of Life

文系・理系の垣根を越えて
「生命」をめぐって繰り広げられる白熱の議論。

「学際的」という言葉を知っていますか? 多様な専門領域を横断しながら、新たな知を生み出していく学問の方法を指す言葉です。
ふだんは異なるフィールドの第一線で活躍している人文・社会・自然科学の専門家11名によるこのオムニバス講義で、「生命」をめぐる「学際的な知」の現場をぜひとも体感してください。

商学部准教授 石川学

身体知・音楽ⅠⅡ

Learning Through Affective Experience and Active Participation: Historical Performance Practice of Music

歴史的音楽（器楽・声楽）を、
当時の演奏習慣に基づき演奏していきます。

音楽は、身体を介在し表現され、歴史の中で常に、人間の知的な活動と連携してきました。
この授業では、音楽を身体で表現することを通じて、歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から見つめ直すことを目的としています。

経済学部教授 石井明

日吉学

Hiyoshi-ology

ここでしか学べません。
過去から未来を読み解く体験型教育プログラム。

「日吉学」の特徴は、他では考えられない顔ぶれと手法と素材が合体すること。
多様な受講生と共に探検・体感し、テーブルを囲み、新鮮な発想をぶつけ合い、多彩な教授陣と共に考えます。教材には塾生なら必見の歴史的宝物が続々登場!

法学部教授 大出敦

ゲーム学

Game studies

ヴィデオゲームが提起する諸問題について
アカデミックな立場から考察をおこないます。

普段は遊びに過ぎないヴィデオゲームも、巨視的なスケールで見れば今日、多くの産業、文化、技術分野において中心的な位置を占め、また、さまざまな問題を提起しています。
ヴィデオゲームの周辺で現在起こっていることを知り、ゲームに関する諸問題についてアカデミックな考察をしてみませんか?

経済学部教授 新島進

エンターテインメントビジネス論

Entertainment Business

エンターテインメントビジネスについて理論と実務の
双方から学際的・分野横断的にアプローチします。

アニメやゲームを始めとしたエンターテインメントビジネスは、法学・経済学・商学・文学・理工学等多くの学問分野を横断する学際的分野です。エンターテインメントビジネス関連分野の第一線の研究者・最前線で活躍する実務家による講義を通じて、エンターテインメントビジネス、とりわけアニメ・ゲーム・スポーツに係るIPの開発・展開に関する方法論を体系的に教授します。

理工学部教授 山下一夫

敬称略。所属・職位は2023年1月現在

アカデミック・スキルズⅠⅡ

協生の時代の知を築く

大学の授業では、自ら調べ、書き、発表する能力が求められます。レポートを書く。論文を書く。レポートや論文の内容について、プレゼンテーションする。学年が上がれば上がるほど、そういうことができるか否かが、評価の分かれ道になってゆきます。少人数の授業では特にそうです。
ところが大学では長いあいだ、どうすれば調べて書いて発表できるようになるかについて教えてきませんでした。大学の授業は、経済学でも政治学でも法学でも文学でも物理学でも化学でも、講座名にかなう専門的内容をきちんと教えます。けれどたとえば、学期末に提出の求められるレポートや論文の作り方のことになると、たいていは自助努力に任されます。
もちろん、高校までの経験や大学に入ってからの見様見真似で、いきなり出来てしまう人はいます。しかし、かなり多くの学生が戸惑い躓いてしまうのもまた事実なのです。
そこで慶應義塾大学に生まれた授業が、教養研究センターの開講するアカデミック・スキルズです。この授業は、レポートや論文を執筆するときの調べ方、書き方、そして発表の仕方について、そのスキルを学ぶことを主眼とします。なるべく早いうちにそういう仕方を学んでおくことは、どのような学問を専攻するにせよ、必ず役に立ちます。近年では多くの大学で同内容の授業が増えてきていますが、慶應のアカデミック・スキルズはこの道の老舗です。
といっても、調べ方、書き方、話し方に、絶対的に決まったスキルはありません。マニュアル本のようにはゆきません。最後は人それぞれです。とはいえ、多くの場合通用する、能率的で効果的なやり方というものはあるのです。そのことを少人数形式でじっくり学んでみませんか。

※授業の性質上、春学期・秋学期を通しての履修を推奨します。

授業の特長

学部共通科目・少人数制・複数教員制
さまざまな学部の学生が少人数で一緒に学びます。1クラスに専門分野の相異なる複数の教員がつきます。

コンペティションの開催と論文集の作成
授業のまとめとして、各クラスから優秀な論文とプレゼンテーターを選出し、コンペティション開催を予定しています。
また、履修者の提出論文を掲載する論文集も作成されます。

授業紹介

論文作成とプレゼンテーションの仕方を系統立てて学んでゆきます。
個人で完成し、内容についてのプレゼンテーションを行います。
論文のテーマの選択については自主性が尊重されます。

佐藤望（編著）・湯川武・横山千晶・近藤明彦
「アカデミック・スキルズ
大学生のための知的技法入門 第3版」
（慶應義塾大学出版会、2020）

2023年度 アカデミック・スキルズⅠⅡ 講師紹介

クラス・学期・時限	担当教員
水曜クラス（春・秋）5限	片山杜秀（法学部教授） 御園敬介（商学部教授）
木曜クラス（春・秋）5限	石川学（商学部准教授） 小林拓也（理工学部専任講師） 見上公一（理工学部准教授）
金曜クラス（春・秋）5限	原大地（商学部教授） 玉木寛輝（教養研究センター講師（非常勤）） 諸橋英一（教養研究センター講師（非常勤））

敬称略。所属・職位は2023年1月現在

シラバス（春学期）の基本イメージ例

（実際の授業は各担当教員の創意工夫に基づき行います）

●グループ論文を作成する場合

回	授業内容
1	履修者を選考します
2	グループ分けとみんなの自己紹介をします　ミニ講義「問題意識の見つけ方」
3	小論文を書いてみよう　ミニ講義「論文とは何か」
4	グループ論文のテーマについて議論しよう　ミニ講義「グループ論文の作り方」
5	メディアセンターで資料の探し方を学ぼう
6	そろそろグループ論文のテーマを決めよう
7	グループ論文の章立てを考えよう　ミニ講義「参考文献表の作り方」
8	各章の概要を決めよう　ミニ講義「プレゼンテーションの仕方」
9	グループ論文の骨子をみんなにプレゼンテーションしよう
10～11	論文の作成と指導に集中します
12～13	グループ論文の深まった内容を改めてプレゼンテーションしよう
14	グループ論文を最終完成します

論文コンペティション入賞作（過去の例より）

法学部2年　タレントの自殺報道による自殺誘発と予防 ―日本国内の新聞分析を通じて―

法学部2年　トランスジェンダーのトイレ利用に関する問題 ―及び性的指向・性自認に基づく差別禁止に向けた法整備への展望―

プレゼンテーション・コンペティション入賞作（過去の例より）

法学部2年　N高等学校と伊計島の未来

商学部2年　女性による女性運動から分析する日韓女性アイドルグループ

学生の声（2019年度受講生）

大学生になって初めの年、何か一歩踏み出したいと思いました。特に、私は論文の書き方を知らず、人前で話すことも苦手だったので、少しでも成長できたらと思い、この講座を受講することにしました。
講座を通じて、疑問を言葉にする難しさを知るとともに、それを友人や先生方に相談できるようになりました。
1年生にとって、これからどんどん増えてくるであろう論文課題に、時間をかけてじっくり取り組めることは、きっと良い経験になると思います。

法学部1年

知識を用いて、説得力のある議論をする方法を知りたかったことと、自分でテーマを設定して、探求するという経験を積みたかったので、受講を決めました。
少人数制なので先生と生徒の距離が近く、個々人に適切な助言をしてくださり、研究や論文に関する些細な質問も気軽に行えました。
プレゼンや文章の作り方が以前よりも上達したとともに、様々な資料を集めて、読解し、それらを利用するという工程がわかり、自分の意見を構築していくことに慣れることができたと思います。

理工学部1年

大学生になるからには論文の書き方を知っていないといけないと感じ、教養を身につけられるということもあって、この講座を選びました。
授業を通じて、論文と作文の違いがきちんと理解でき、客観的かつ独自性を持つということがどういうことなのかを理解し、身につけることができました。
まだまだ甘いけれど、プレゼンテーションをわかりやすくつくる術もわかりました。
大変ですがすごく勉強になり、論文を書き終えたあとの達成感はすごいです。

薬学部1年

身体知

創造的コミュニケーションと言語力

私たちはもちろん体を通して生きている。それは当然のことですが、あらためてこの「身体」に注目した全く新しい学びの在り方を、自分たちで探っていくワークショップ形式の授業です。鑑賞する対象の芸術作品を他者とともに議論したり、身体ワークショップを通して解釈したりしてみると、どんな新しいことが見えてくるだろう。そこから自分たち自身が創作者になってみたらどうだろう。創作したものを他者はどう見るだろう。そんな経験をワークショップを通して、異なる世代とともに味わうことが「身体知」授業の醍醐味です。夏季休校期間中の1週間を使って、集中的に通信教育課程の学生と通学生がともに活動するのもこのクラスの特徴。「学び」、「仲間」との新しい出会いのみならず、新しい自分との出会いが待っています。

2022年度の題材をとった*New Sudden Fiction*

授業の特長

全く新しい学びの体験
座学ではない、頭も体も総動員する授業です。

異なる世代が集う授業
通信教育課程の学生と通学生とが世代を超えて、学ぶ場を共有します。

夏期集中コース
夏季休校期間中の1週間を使った集中コースです。

授業紹介

言葉に命を吹き込んでみる。

通学課程と通信教育課程の学生がともに学ぶ場です。いくつかの短編小説を「読む」・「声に出す」・「作品について語る」ことを通して、言葉が織りなす様々な意味を味わってみましょう。自分がそこから読み解くことが他者とどう異なるのか。声というものを通して文学作品を読むと、どう自分の解釈が異なってくるのか。直に体感してみてください。その後、様々な身体ワークショップを取り混ぜながら、創作へと向かいます。他者の話を「聴く」・「からだで表現する」・「言葉で表現する」といういくつかの段階を経て、そこでの体験をもとに、言語や身体を使った新しい創作表現へとつなげます。性別や年代が異なるクラス環境だからこそ可能になる授業内容を展開していきたいと思っています。最終的に成果を一般に公開するミニ公演を開催し、皆さんの作品を他者とシェアします。
※公演等、新型コロナウイルス感染状況によって中止・延期となる可能性があります。

近年のテーマ

2022年度
「さかのぼる」

「さかのぼる」をテーマとして、パンデミック前の自分たちにも思いをはせてみることにしました。また、このテーマをもとに題材として3つの作品を選びました。一つは大きな歴史を個人の歴史から見つめる、サム・シェパードの『ベルリンの壁のかけら』。そして、BLM運動という大きな問題につながるクルティア・ニューランドの『リバーシブル』。3作目は去年に引き続き、個人の命を宇宙の成り立ちにまでさかのぼって見つめる短編、ジェニー・ホロウェルの『あなたを含めて何もかもの歴史』を取り上げました。これらの作品をもとに、グループによる議論と創作を行いましたが、それぞれの解釈と想いを戦わせる白熱した議論は、対面だからこそ可能となったものです。このぶつかり合いは新たな創作へとつながり、6日間という密な空間と時間を醸成しました。

2021年度
「心象風景」

通信教育課程がオンラインとなったために、2021年度は通学生のみの開講となりました。取り上げたのは3つの短編、クリスティー・ローガンの「光を食すもの」、ジェニー・ホロウェルの「あなたを含めて何もかもの歴史」、スペンサー・ホルストの「輝く静寂」です。新型コロナウイルスによって密な身体接触ができなかったものの、気を付けながら、ブラインドウォーク、呼吸を感じるペアワークなどの身体ワークショップを行い、それぞれの作品を絵画、演劇、ダンスの要素を取り入れながら読み解きました。またどの作品も絵画的な表現が特徴だったので、自分の中にある心象風景、実際にいま目にしている風景、そして1週間が終わった時に見ている・あるいはこれから見えるであろう風景をそれぞれ授業の中で創作として織り込みました。少人数ながら、パンデミックの時代にしかできない授業が展開されました。

※2021年度「身体知」は法学部設置科目として開講しました。

学生の声（2022年度受講生）

知識の面だけではない、物事を捉え、解釈し、判断するための材料をこれからも蓄えたい。

私は表現をするのが好きな側だと思う。しかしこの授業で、演じること＝表現、ではないことを理解した。今までこのような方法で物語を解釈したことはなかったし、解釈した他人の意見を聞き、議論を交わす中で、「考え」を発展させていくこともなかった。自分と相手の“音”の共通部分、異なる部分の重ね合わせ、が議論であり、表現そのものであった。議論をしたり作品を作ったりするときに、自分の中身を相手に見せるような感覚を味わった。屈折せずに中身が見えるように、その色彩が豊かになるように、その体積が大きくなるように、たくさん吸収しなくては、勉強しなくてはと思った。知識の面だけではない、物事を捉え、解釈し、判断するための材料をこれからも蓄えたい。

薬学部1年

表現に自信がある人々よ、いざ集え！

初心者でよい、朗読や演劇に慣れていない人にこそとってほしい、が授業での呼びかけだった。私はあえて逆の人々に勧めたい。表現に自信がある人々よ、いざ集え、と。私は正直なところ、朗読にも自信があったし、演劇には興味を持っていた。だから、授業には意気込んで臨んだ。しかし、結果は惨敗。表現活動がはじめてだという人の詩に泣かされた。踊ったことがないという人の動きに震撼させられた。私は（上手く読めるはずだ、できるはずだ）という気持ちに圧されて、緊張して言葉は小さかった。悔しくて、悔しくて、自分を解放するためにまっさらになることができた。表現が得意な人にこそ、参加してほしい。そして、まったくの初心者のパッションに、打ちのめされてからが本番である。ぜひ、一緒にくやしくてくやしくて仕方がない朗読をしましょう。

文学部4年

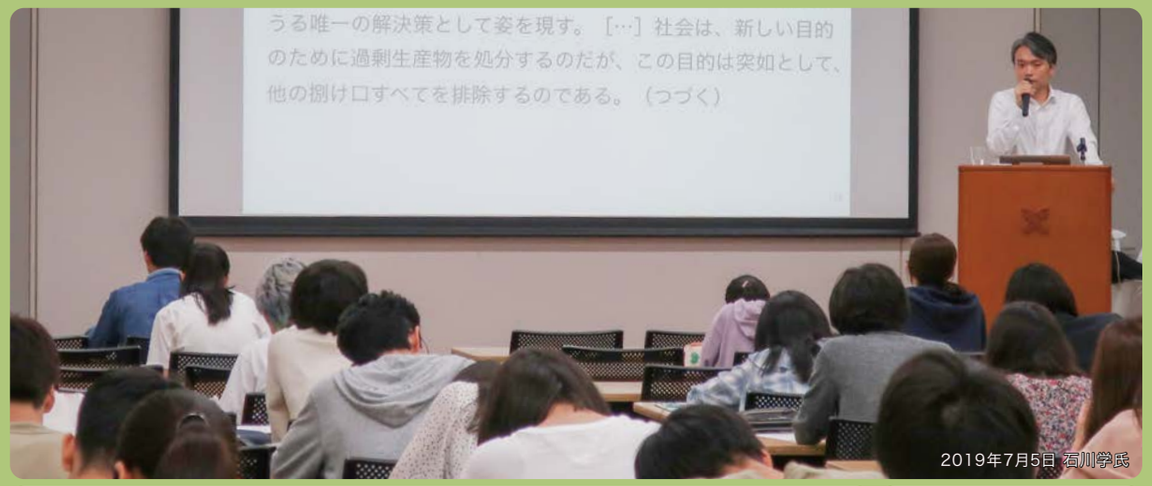
迷いに迷って受講を決めた自分に感謝しています。

身体知の受講を迷っている皆さん。あなたが迷っている理由は何ですか？迷ったとき、踏み出すか引きさがるかという選択は、大きな分岐点のように見えるかもしれませんが、本当の分岐点は迷うか迷わないか、「身体知」という言葉に引っかかるか目もくれないかです。僕は、迷いに迷って受講を決めた自分に感謝しています。これを読みながらまだ迷っているあなたが、どのような選択をするかは私には関係がありません。

文学部1年

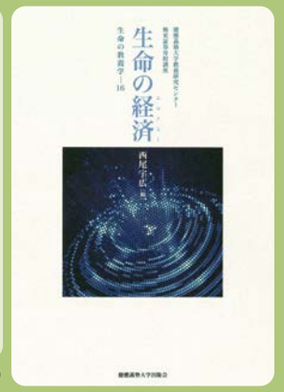
生命の教養学

贈与

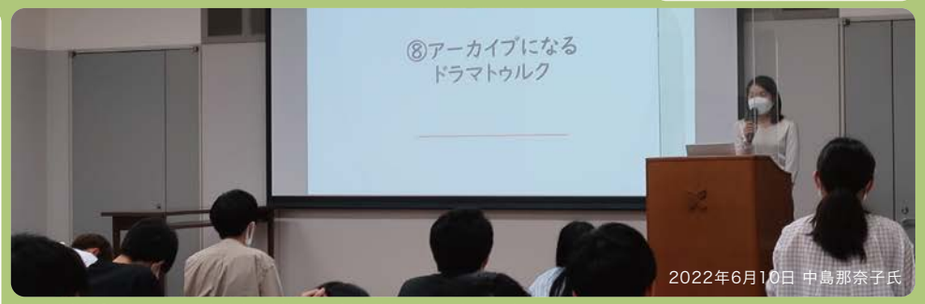


2019年7月5日 石川学氏

この授業は「生命とは何か」「生きるとはどういうことなのか」という問いから始まる知的探究への誘いです。「生命」については生物学をはじめ、主に自然科学に属する諸分野が「生命科学」の枠組みで研究を進めていますが、それだけではありません。哲学・文学・歴史学・文化人類学などの人文学、経済学や政治学といった社会科学もまた、それぞれ異なる角度から「生命」を問い続けているのです。もとより一面的には捉えがたいこのような対象にアプローチするうえで、必要なものとは何でしょうか。それは、特定の学問領域に偏ることなく広く思考の素材を追い求め、各領域の研究成果には十分な敬意を払いつつも、その雑多な素材を元手として、新たな知を創り出そうとする探求の姿勢にほかなりません。ときに「教養」とも呼ばれるそのような態度を涵養する場、それがこの「生命の教養学」なのです。



西尾宇広（編）「生命の経済 生命の教養学16」（慶應義塾大学出版会、2020）



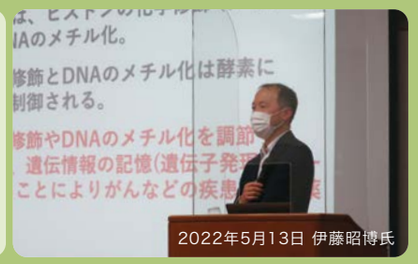
2022年6月10日 中島那奈子氏

荒金直人（編）「組織としての生命 生命の教養学15」（慶應義塾大学出版会、2019）

授業の特長

多彩な分野を代表する講師たちによっておこなわれるオムニバス授業

自然科学、社会科学、人文学など、多彩な分野のそれぞれ最先端で活躍している講師が週替わりで登壇し、濃厚な講義をおこないます。各講義では原則として1時間程度の講義のあと、自由な質疑の時間が設けられます。学期の最初と最後には、コーディネーターによるオリエンテーションと総括がおこなわれます。



2022年5月13日 伊藤昭博氏

授業紹介

生命の鍵、「贈与」を探求する。

2023年度の本授業のテーマは「贈与」です。「贈与」は近年、とりわけ人文・社会科学系の分野でホットなトピックとなっており、人間の社会性の基礎、それも、あまりに根源的であるがゆえに忘却されがちな基礎として、再注目の必要性が活発に議論されています。一方で、よく知られるとおり、「贈与」的な振舞いは人間の専売特許ではなく、鳥類や哺乳類をはじめとした動植物や、さらには細胞のレベルなど、生命の様々な位相に存在し、その存続と発展を可能にする鍵として機能しています。「贈与」が示唆するのは、人間を含む諸々の生命が、利己主義的なエコノミーに還元されない、対他関係への指向を本質的に宿している事実です。文理の境界を越えて、この主題をめぐる幅広い学問分野の知見を結集することは、人間中心主義と利己主義を暗黙裡に自明とした現代人の思考パラダイムを相対化し、多様な生命の共生を旨とする次世代の思考の道筋を開拓するための重要な一助となるはずであり、本授業ではそれを目指します。今回、文学、哲学、歴史学、人類学、生物学、農学等々の専門家による講義を予定しています。

2022年5月6日 坂内博子氏

2023年度「生命の教養学」

- 合理と不合理 ～ ヒトとはどのような生き物か
  小林佳世子（南山大学 経済学部 准教授）
- 分かち合うこと・分かち合わないこと：狩猟採集社会におけるシェアリング
  丸山淳子（津田塾大学 学芸学部 教授）
- オスとメスの間の繁殖をめぐる贈与
  安部淳（神奈川大学 理学部 非常勤講師）
- 利益と贈与の西洋思想史
  藤岡俊博（東京大学大学院 総合文化研究科 准教授）
- 言語からコトの捉え方を探る：Dativ（与え（られ）る格）の文法
  田中愼（慶應義塾大学 文学部 教授）
- 文化的農業景観の保全に果たす贈与の役割：境木（さかいぎ）に着目して
  徳岡良則（農研機構農業環境研究部門 上級研究員）
- 歓待の罠と贈与のモラル：中国農村の日常生活の場面から
  川瀬由高（江戸川大学 社会学部 講師）
- 森林生態系における「贈与」：きのこ・植物・動物の相互作用
  糟谷大河（慶應義塾大学 経済学部 准教授）
- 生命の贈与：アステカ人の供犠のコスモロジー
  岩崎賢（神奈川大学 外国語学部 准教授）
- チャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』
  新井潤美（東京大学大学院 人文社会系研究科 教授）
- 命の贈与 ― 極北先住民イヌイットの狩猟と食物分配
  岸上伸啓（国立民族学博物館 教授）

コーディネーター：石川学（慶應義塾大学 商学部 准教授）

敬称略。所属・職位は2023年1月現在
※講師、タイトルは変更となる可能性があります。

過去の開催一覧

2022年度 ●「記憶」　2019年度 ●「生命の経済」　2018年度 ●「組織としての生命」　2017年度 ●「感染」

学生の声（2019年度受講生）

「大学らしい」「学際的な知」を体感できる講義です。新しい興味がこの授業で生まれるかもしれません。

理工学部1年

理工学部生として大学に入り、情報系の学科に進むつもりではありましたが、哲学や文学にも興味があったので、オムニバス形式の講義に魅力を感じました。大学に入りたての自分にとって、一つのテーマを軸に様々な学問の姿を見て回れるというのは、大変刺激的な場のように思えたからです。普段目にとまらない分野だけでなく、好みの分野であっても、ふつうでは出会えないような専門性を持つ先生方のお話を聞けるというのは、大変貴重なものだと実感しました。授業を通して、興味を持てる分野も新しく増えたと思います。特に、文学・思想の回と歴史研究の回は印象的で、新たな知見・興味が生まれる契機になったように思えます。自分が今後専門とする分野とはかけ離れていますが、全く新しい興味を見つけ出せたこと自体が、僕にとっての大きな収穫です。一つ一つの内容の密度がとても高いこの講義を、是非、好奇心を持って履修してみてください。

身体知・音楽ⅠⅡ

—古楽器を通じた歴史的音楽実践—
—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—

写真提供：（公財）横浜市芸術文化振興財団

音楽を通じて歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から理論的に見つめ直します。音楽演奏の実践体験によって、身体を通じた歴史・文化・言語の総合的な学習を行います。
器楽・声楽それぞれ歴史的音楽作品の演奏実践を行い、耳と感性知識、身体を結びつけ、それによって身体を媒体として継承される歴史・文化・言語の連関を実際の体験によって学びます。学期末に公開演奏会を行い、学内・地域に開かれたかたちで成果を披露します。

授業の特長

器楽アンサンブルと、声楽アンサンブルの2つの部門に分かれて行われます。

器楽アンサンブル部門
バロック・ヴァイオリンやチェンバロなど、一般的に古楽器と呼ばれているバロック時代の楽器を用いて、17世紀および18世紀の西洋音楽を実践的に学んでいくというのがこの授業の最大の特徴です。

声楽アンサンブル部門
合唱音楽の原点とも言える、ルネッサンスおよびバロック期の合唱音楽を主に取り上げます。これを実践的に探究していくだけでなく、学問的な観点からも合唱音楽の本質を考察していきます。音楽の発展の中で、人の声が担った役割は大きく、音楽の歴史に与えた影響は計り知れないところがあるということを確認していきます。

授業紹介

器楽アンサンブル部門

バロック・ヴァイオリンやチェンバロの他に、バロック・ヴィオラ、バロック・チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、バロック・オーボエ、リコーダー、フラウト・トラヴェルソ、バロック・ファゴットなどの、バロック時代に使われていた楽器を用いて、当時書かれた、トリオソナタなどの室内楽編成のための作品と、より大きめなアンサンブルであるバロック・オーケストラ（20人程度）のために書かれた音楽作品を取り上げ、バロック時代の音楽作品について深く理解していきます。実践を通じ、17・18世紀の作曲家たちが何を演奏者に、そして聴衆に求めていたのかということや、17・18世紀の器楽作品には、どのような音楽的メッセージが込められているのかということなどを、現代ではなく、当時使われていた楽器を用いることで探求していきます。なお、使用ピッチはa=415となります。一年を通じて、2回ほどの成果発表演奏会を、協生館藤原洋記念ホールで行う予定です。

声楽アンサンブル部門

音を記号化し記録するという行為、つまり楽譜の発展は、多声音楽と共に歩んできたと言っても過言ではありません。そのくらい、合唱音楽が音楽の歴史の中で重要な役割を担っていました。ルネッサンスの時代が終わるまでには、4声、5声、6声またはそれ以上の声部のために、複雑な作曲技法が用いられて数多くの声楽作品が書かれました。そのような時代では、芸術性を高めるということが神への距離を縮めるとも考えられていました。結果、現代までに残されているルネッサンス期の合唱曲の大半は、宗教音楽の分野に属する作品です。しかしながら、バロックの時代の幕開け頃（1600年前後）には、世俗的な音楽にも宗教作品で培われた、もしくは新たに生まれた作曲技法が用いられるようになっていき、声のための音楽の奥行が広がっていきます。このような状況を合唱音楽を実践的に取り組むことを通じて、学んでいきます。

この授業は、日吉音楽学研究室と連携して行っています。
詳しくはホームページ
http://www.musicology.hc.keio.ac.jp/を
ご覧ください。

学生の声（2022年度受講生）

古楽器の演奏を通して音楽観が広がる。

私は小学生でバイオリン、中学生ではフルートを演奏し、高校時代は、ティン・ホイッスルというアイルランド発祥の縦笛を演奏していました。石井先生の「身体知・音楽」は4年生になって履修。初めてバロック・バイオリンに触れたとき、すぐに「違い」を感じ、演奏してみると古楽ならではの奏法や拍の取り方などが新鮮でした。自分自身の音楽観が広がり、今まで以上に演奏することや音楽を鑑賞することを楽しめるようになったと感じています。

文学部4年

難しさの中にやりがいを感じる。

この授業は自分の担当楽器以外にもさまざまな珍しい古楽器と接することができ、また幅広い年齢層の方々と演奏する機会でもあり毎回楽しみです。現在のオーボエは金属製のキーを押さえて演奏しますが、バロック・オーボエはリコーダーと同じく自分の指でしっかりと穴を押さえなくては良い音は出ません。それが難しさでもあり、演奏しがいを感じる点でもあります。
この授業を通して音楽を一生の趣味にする気持ちがますます強くなりました。

薬学部4年

慶應義塾発行「塾：2022 SUMMER（No.315）」より引用

日吉学

日吉タイムトラベル

日吉キャンパスには広大かつ豊かな自然や歴史環境があります。縄文、弥生、古墳時代の遺跡や1200種を超える生物や植物が生息する森、アジア太平洋戦争末期の帝国海軍の秘密基地や建築史上重要な建造物。福澤先生は『学問のすゝめ』で、「事物の観察」が学問の第一歩と語っています。「日吉学」では観察とフィールドワークを介して体感し、単なる知識の蓄積にとどまらず、生きた知へ発展させることをめざしています。
これからの社会には、文系理系にとらわれず多面的視点から生み出される創造的な発想が求められるでしょう。つい見過ごしがちな身近なことと現在の我々を取り巻く問題とのつながりに触れることで、広い視野と深い洞察力の重要性に気づき、グループで課題に取り組むことで、問題の発見・解決における個人の主体性と他者との対話・協働の大切さを学びます。

コーエーの襟川陽一社長から盾を授与された受賞者

授業の特長

慶應義塾唯一の授業 慶應のお宝に触れ学びます。

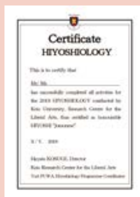
多彩な講師陣と幅広い受講者が魅力

対象は慶應義塾に在籍する高校生（オブザーバー）から大学院生まで。年齢の異なる参加者が混在するグループワークで、多様な発想からの刺激、異なる意見の調整方法を学ぶことができます。

多様な「熱い」学びのかたち

講義とフィールドワーク・体験と討論。最終プレゼンテーションには予行演習で教員の指導、本番では学生と教員による熱い合評会。各自レポートの書き方も学べます。

**日吉学修了証がもらえる
公開発表会も予定されています。**



授業紹介

こんな授業があったのか！
キャンパスを通して自分たちの過去・現在・未来を考える。

みなさんは、ふだん何気なく過ごしている日吉キャンパスがどんなところか、改めて考えてみたことはありますか。ちょっと気にして目を向けると、いろいろな発見があります。日吉キャンパスは、弥生時代には一大集落でしたし、古墳や中世の城までありました。そして1934年に慶應義塾がこの地にキャンパスを作ります。こうしたものが地層のように積み重なっているのではなく、実はそこかしこに露呈しているのが日吉キャンパスです。
2023年度の日吉学は「タイムトラベル編」と題し、日吉の過去から未来までを旅してもらいます。有史以前、日吉の地はどのように形成されたのか、縄文人や弥生人はこの地でどのような生活をし、中世や近世では人々が日吉でどのような生活を営んでいたのか、そして昭和9年に慶應義塾予科が開校したことで、日吉はどのように変わったのか、そしてこれから日吉がどう変化していくのか、といったことを日吉キャンパスや日吉の街のフィールドワークを通じてみなさんと一緒に考えていく予定です。
前半の7回で課題発見のための学習とフィールドワークを行い、後半7回で各自が発見した課題を解決するための資料・情報の収集や整理、理解を深めるための議論を行います。最後に各自、プレゼンテーションを行い、それを踏まえてレポートにまとめて提出してもらいます。

2023年度 講師紹介

■安藤広道（文学部教授）
縄文から戦争遺跡まで幅広く専門とする
慶應のインディアナ・ジョーンズ？ 考古学者。

■都倉武之（福澤研究センター准教授）
慶應義塾のことなら何でもお尋ねあれ、
即座に！ 詳しく！ 解説可能な歴史学者。

■福山欣司（経済学部教授）
「慶應の森」を歩き、愛する森の守りびと。本当はカエルが専門の生物学者。

■不破有理（経済学部教授）
日吉のマドンナ。なぜかアーサー王伝説が専門の英文学者。

■大出敦（法学部教授）
アカデミック・スキルズ教育のプロ。本当はポール・クローデルが専門の仏文学者。

■阿久澤武史（高等学校教諭）
日吉台地下壕保存の会の会長にして
日吉の建築探偵・塾高の校舎をこよなく愛する国語の先生。

■杵島正洋（高等学校教諭）
ハレー彗星に魅惑され天文学者になるはずが、地学学者に。
地形や地層や岩石のわずかな痕跡から、過去の出来事を読み取る名探偵。

■太田弘（教養研究センター講師）
名探偵コナン推理ファイル『地図の謎』の監修者で地図教育も専門。
マップコミュニケーターの異名をもつ地図学者。

■縣由衣子（外国語教育研究センター・文学部講師）
反転学習のプロフェッショナル。ミシェル・セールの専門家。

敬称略。所属・職位は2023年1月現在

【授業の形式】春学期・火曜5限　**知識と体験を自由な発想で味付けをして、熱く冷静に考察する、ユニークな授業**

知識・体験		→	課題を見出す		→	まとめる	
事前学習	フィールドワークや実験		グループワーク	ディスカッション		プレゼンテーション	レポート作成

学生の声（2021年度受講生）

大学生でよかったと思える場。
日吉学の魅力の一つは、先生方と生徒の距離の近さにあります。知的欲求を満たすことができ、大学生として勉学に励むことの楽しさを実感することができます。また、生徒間の絆も深く、講義後も議論をしつづけたのは非常に良い思い出です。皆さんもぜひ受講してみて、大学生の醍醐味を感じてください。
法学部2年

探求意欲が掻き立てられました。
日吉学を受講したことは、私の大学生活によって非常に有意義な経験でした。1つのテーマを文理問わない様々な切り口から検討する授業を受けると、自ずと探究意欲が掻き立てられます。教授の学びに対する愛をひしひしと感じることで、自分の新たな関心分野に気づくことができるかもしれません。大学での学びに対して不安を感じている新入生にこそぜひ受講してほしいです！
法学部1年

日吉で学ぶ意味を再認識する授業。
日吉学の意味とは日吉の歴史的背景に触れ、さらに日吉のことを好きになる授業だ。壮絶な過去を乗り越え今に至る時空の連続性を見逃すわけにはいかない。学部、学年を超えた仲間や教授との出会いは我々に多くの視点をもたらしてくれると強く感じている。時間や立場をも忘れ議論に熱中できる。そこには慶應義塾が掲げる半学半教の場が待っていることだろう。
経済学部1年

さまざまな塾生が集う学びが体験できます！
日吉学はさまざまな学部・学年の学生が集まり、フィールドワークを通して自分の興味のある分野を研究するという学びができる場です。私は日吉学を受講したことで地下壕を見学するという貴重な経験をし、自分の興味を深めてまとめていくという大学で求められる学びを知ることができました。一歩深い学びを体験したいと考えている学生には日吉学の受講を強くお勧めします。
文学部1年

ゲーム学

ヴィデオゲームについて学ぶ、考える

みなさんのなかにも平素、コンピュータゲーム、ヴィデオゲーム、ゲームアプリに親しんでいる人は多いでしょう。それは遊びや息抜きの時間かもしれませんが、巨視的なスケールで見ればゲームは今日、多くの産業、文化、技術分野において中心的な位置を占め、また、さまざまな問題を提起しています。たとえば桁外れのエンターテインメント市場と化した中国と日本のIP（知的財産）の関係。仮想現実技術などの高度なテクノロジーがいかに最新ゲームに応用されているか。あるいはゲーム依存が社会問題化する一方、物語の伝播媒体として、これまで本や映画が担っていた役割を今ではゲームが果たしているともいえます。ではそうした旧来のメディアとゲームとの違いはなんでしょう？ つまりゲームには学問をする余地があります。普段は遊び、消費するだけのゲームかもしれませんが、そこから一歩踏みこみ、ゲームの周辺で現在起こっていることを知り、ゲームの諸問題についてアカデミックな考察をしてみませんか？

授業の特長

ヴィデオゲームをアカデミックに考察する

ヴィデオゲームが提起する諸問題についてアカデミックな立場から考察をおこないます。個々のタイトルについてのゲーム批評とは異なり、学際的な立場からゲームの現状や、ゲームとはなにかを考えるためのヒントを提供します。

授業紹介

ヴィデオゲームが提起する諸問題について、
アカデミックな立場から考察をおこないます。

ヴィデオゲームをめぐる多岐にわたるテーマを、産業、文化、技術といった分野の専門家とともに学びます。慶應義塾教員、他大教員に加え、ゲーム業界の最前線にいる方にも講師として登壇していただきます。講義のあとに質疑応答をおこない、履修者にはリアクションペーパーの提出が課されます。感染状況が悪化しない限り、授業は対面でおこないます。

2023年度「ゲーム学」

- ■ゲームをどう保存していくか
  井上明人（立命館大学 映像学部 講師）
- ■神経医療とゲーミフィケーション
  牛場潤一（慶應義塾大学 理工学部 教授）
- ■シブサワ・コウのゲーム開発
  襟川陽一（株式会社コーエーテクモホールディングス 代表取締役社長）
- ■コーエーテクモのゲームエンジン
  三嶋寛了（株式会社コーエーテクモゲームス 執行役員フューチャーテックベース部長）
- ■（実践）中国巨大市場への挑戦
  大里雄二（日中エンタメプロデューサー）
- ■日本のゲーム産業
  小山友介（芝浦工業大学 システム理工学部 教授）
- ■デジタルゲームに見る着せ替え人形的表現
  堺文男（尚美学園大学 総合政策学部 講師）
- ■推しエコノミーのキャラクター経済圏
  中山淳雄（(株)Re entertainment代表取締役社長
  慶應義塾大学 経済学部 訪問研究員）
- ■バーチャルリアリティの進化、拡張するゲーム体験
  南澤孝太（慶應義塾大学 大学院 メディアデザイン研究科 教授）
- ■ゲームと文学――テクスト、仮想現実、身体性
  新島進（慶應義塾大学 経済学部 教授）
- ■アニメ産業 20年に一度の地殻変動に迫る
  平澤直（アーチ株式会社 代表取締役）
- ■ゲーム依存について
  藤田博史（医療法人ユーロクリニーク 理事長）
- ■数値化されるキャラクター～「三国志」「信長の野望」のリアリズム～
  吉永壮介（慶應義塾大学 文学部 教授）
- ■フランスにおけるヴィデオ・ゲーム
  ローベル,ロラン（慶應義塾大学 商学部 訪問講師（招聘））

コーディネーター：新島進（慶應義塾大学 経済学部 教授）

敬称略。所属・職位は2023年1月現在
※講師、タイトルは変更となる可能性があります。

学生の声（2021・2022年度受講生）

ゲーム業界の様々な知見を知ることができます。

ゲームを軸として様々な分野の知見を得られたことが非常に魅力的でした。普段プレイするだけのゲームをいつもとは違った視点で見てみると、ゲームには色々な可能性があるのだと気付くことが出来ました。また、ゲームは医学や工学など様々な分野から学ぶことが可能ですが、そのような分野を専攻していない学生でも理解出来る授業です。

総合政策学部2年

将来の進路についても考えさせられました。

どの講義の回もとても面白く各業界の専門家の先生から貴重なお話を伺うことができました。将来、アニメ関係の仕事につきたいと考えていたので、「アニメ産業　20年ぶりの地殻変動とゲーム産業」の講義は本当に参考になりました。

環境情報学部2年

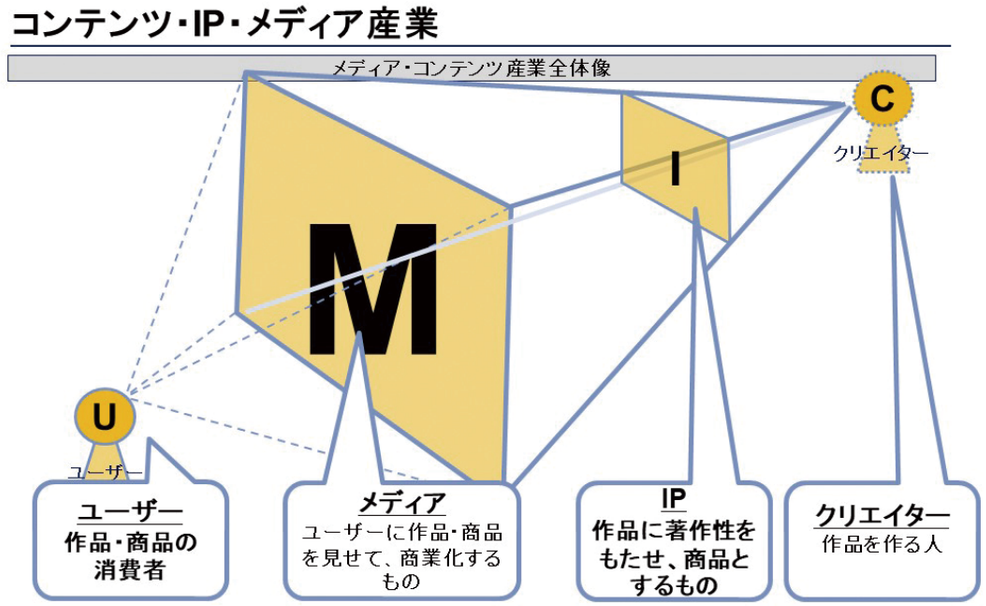
ゲームに対する造詣を深めるだけでなく、商業展開や他国との繋がりを実感しました。

ゲーム学の講義では、単純にゲームそれ自体に対する造詣を深めるだけでなく、ゲームを軸として商業展開や他国、特に中国との繋がりを実感しました。国によってゲームに何を求めるのか、国ごとの文化の特性も分かり、今後、ゲームに関わる仕事をしたいと思っていなくても、ゲームを作る国自体に興味を持つことができると思います。また、ゲームの進化の過程で、AIや脳波を組み合わせて、一口にゲームと言っても、私たちが日常的に遊ぶものだけでなく、医療やスポーツとしても成立していった、または、していく過程を学ぶことができます。授業内においては、単純に講義を聞くだけでなく、脳波とゲームを組み合わせた回では、希望者は装置を使って、自身の脳波を測定し、ストレス、喜びなど様々な項目を調べることができました。
日吉キャンパスの先生以外にも、三田や湘南藤沢、他大学の先生や、様々な分野に精通している方々の話を聞けるのもこの講義の魅力だと思います。

経済学部1年

エンターテインメントビジネス論

アニメ・ゲーム・スポーツIPの作り方



アニメやゲームを始めとしたエンターテインメントビジネスは、法学・経済学・商学・文学・理工学等多くの学問を横断する学際的な講座です。
エンターテインメントビジネス関連分野の第一線の研究者による講義のみならず、エンターテインメントビジネスの最前線で活躍する数多くの実務家によるゲスト講義も行われます。そのため、エンターテインメントビジネス、特にアニメ・ゲーム・スポーツに係るIPの開発・展開に関する方法論を体系的に学ぶことができます。講義は、理論と実務を往復しながら展開され、エンターテインメントビジネスについて、理論的・批判的な思考を身に着けられます。加えて、具体的な実務の現場で、それがどのように展開しているのか「地に足の着いた」観点も学ぶことができます。

授業の特長

学問横断的かつ産業横断的であり、さらに国際的な講義を提供します

エンターテインメントビジネス（アニメ・ゲーム・スポーツに係るIPの開発・展開）を共通項として、特定の学問・産業分野に限定することなく、学問横断的（経営学／社会学／文化人類学／文学／映画論etc.）かつ産業横断的（ゲーム／アニメ／マンガ／マーチャンダイジングetc.）であり、国際的（日本／米国／欧州／中国etc.）な講義を展開します。

授業紹介

エンターテインメントビジネスについて、
理論と実務の双方から学際的・分野横断的にアプローチします。

国・地域的な多様性を確保し、エンターテインメントビジネス関連分野の第一線の研究者による講義、かつ、エンターテインメントビジネスの最前線で活躍する実務家からも数多くのゲスト講義が展開されます。
法学・経済学・商学・人文学・理工学など様々な分野に跨がるエンターテインメントビジネスの広がりとその可能性について、主に「アニメ・ゲーム・スポーツIPの作り方」に焦点を当てつつ学びます。
アニメやゲームなどが好きで業界の構造に興味を持っている、卒業後はエンターテインメント業界で働きたいと思っているみなさんに必見の講座です。

2023年度「エンターテインメントビジネス論」

講師 中山淳雄 (株)Re entertainment代表取締役社長、慶應義塾大学経済学部訪問研究員
主著：『エンタメビジネス全史　おもしろすぎる発展の歴史と企業の戦略』（日経BP、2023年）
『エンタの巨匠　世界に先駆けた伝説のプロデューサーたち』（日経BP、2023年）
『推しエコノミー　「仮想一等地」が変えるエンタメの未来』（日経BP、2021年）

コーディネーター 山下一夫 慶應義塾大学 理工学部 教授

授業タイトル（予定）	
■第1回　エンタメビジネス概論	■第8回　アニメ産業論
■第2回　テーマパーク産業論	■第9回　アニメ産業―業界ゲスト講師との対談
■第3回　テーマパーク産業ー業界ゲスト講師との対談	■第10回　出版・ラノベ産業論
■第4回　出版・マンガ産業論	■第11回　ライトノベル産業―業界ゲスト講師との対談
■第5回　ゲーム産業論	■第12回　スポーツ産業論
■第6回　ゲーム産業ー業界ゲスト講師との対談	■第13回　スポーツ業界―業界ゲスト講師との対談
■第7回　マンガ産業―業界ゲスト講師との対談	■第14回　テスト、サマリー

敬称略。所属・職位は2023年1月現在
※講師、タイトルは変更となる可能性があります。

学生の声（2022年度）

**身近にあるエンタメをただ楽しむだけでは飽き足らない人や、
作り手の考え方に興味がある人は是非受講してください。**

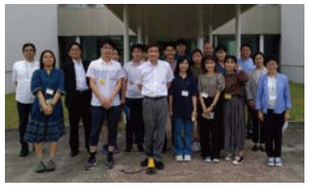
様々なコンテンツに溢れる現代では、漫画やアニメ、ゲームのようなエンタメをいつでも手にとって楽しむことができます。エンタメは私たちの生活を彩る大切な存在です。そんなエンタメについて考える軸を一つ増やしてくれたのが「エンターテインメントビジネス論」です。
この講義ではコンテンツを楽しんでいるだけでは得られない知見に触れることができました。例えば創作物のキャラクター(IP)が作る経済圏の大きさなどを、その業界に身を置く講師の方々に様々なデータとともに紹介して頂きました。受講後はソシャゲー一つをとっても、据え置き型のゲームよりも勢いがある理由や、コラボの重要性などに疑問を抱いたときに、自分の力で答えを考えられるようになりました。このように、この講義ではエンタメを作る人たちが持つ視点の一端を学ぶことができます。身近にあるエンタメをただ楽しむだけでは飽き足らない人や、作り手の考え方に興味がある人に是非受講して欲しい講義だと思います。

理工学研究科修士2年

Information

庄内セミナー　『庄内に学ぶ「生命（いのち）」』

https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/shonai/



慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）がある山形県鶴岡市を拠点にして開催している、生命をテーマにした教養セミナーです。対話と議論を中心に据えつつ、専門家や地元の方々のお話と体験・体感型プログラムを組み合わせた4日間、自然豊かな庄内の地で学部生・大学院生が一緒になって精一杯「生命」について考え、語り、体感します。即身仏拝観、修験体験、先端生命科学研究所ラボ見学など、過去・現在・未来が体の中を突き抜ける「学び」の場に立ち会ってください。（実施方法につきましては慎重に検討し、周知いたします。）

情報の教養学

情報に関わる技術は年々進化しています。しかし、それが世間一般に広く浸透するためには、何らかのきっかけが必要になることが多いです。
例えば、新型コロナウイルス感染症がきっかけで、オンライン会議システムが広く使われるようになりました。「情報」は技術だけではなく、様々な事柄が相互作用し、その成否につながります。また、本来良いと思われることであっても、利用者の使い方次第では悪い結果になりかねません。このようなことを理解するために、2023年度の「情報の教養学」は、情報に関わる様々な話題を一流の講師に講演いただきます。

■2022年度講演

「メタバース（仮想世界）のルールと権利講座」
（福井健策 弁護士）

「情報に踊らされず、世界を平和に導く!」
（伊藤公平 慶應義塾長）

「サイバーグレートゲーム：デジタル技術が変える国際政治」
（土屋大洋 慶應義塾常任理事）

「考える葦とAIの共進化」
（粟原聡 理工学部教授）

「時代と知性を考える」
（安宅和人 環境情報学部教授）

**「デイリーセンシングで賢く自分らしく生きる
～生体信号を用いた感情認識から病気の予兆検出まで～」**
（満倉靖恵 理工学部教授）

所属・職位は2023年1月現在

学習相談

アカデミック・スキルズの修了生を中心とした学生相談員が、学習に関するさまざまな相談を受け付けています。お気軽にどうぞ!
期間：学期中の平日（Webサイト参照）
場所：図書館1Fスタディサポート
https://libguides.lib.keio.ac.jp/hys_studyadvice

読書会「晴読雨読」

学生も教員も対等に語り合う読書会を開催しています。

●**アメリカ文学の中の村上春樹、日本文学の中の村上春樹**
2022年4月～2023年3月　全6回（予定）
〈講師〉ディル, ジョナサン（理工学部准教授）

所属・職位は2023年1月現在

NEW アカデミック・スキルズ –10分講義ビデオ–

●**「未来を考えるための科学史」**　見上公一（理工学部准教授）
●**「サブカルチャー研究」**　新島進（経済学部教授）
●**「映画は読むことができるのか?」**　佐藤元状（法学部教授）
●**「ロシア語について」**　越野剛（文学部准教授）

所属・職位は2023年1月現在。※タイトルは変更になる可能性があります。

※詳細はポスター、web等でご確認ください。https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

Publications

教養研究センターで行われている研究・教育・交流活動は、各種刊行物やウェブサイトにて発信しています。

教養研究センター選書

教養研究センター所員の研究活動を広く知っていただくため、「教養研究センター選書」を毎年慶應義塾大学出版会より刊行しています。

『汎瞑想 ―もう一つの生活、もう一つの文明へ』
熊倉敬聡 2012年

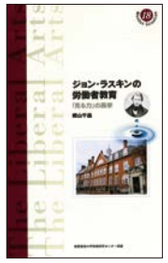
『感情資本主義に生まれて ―感情と身体の新たな地平を模索する』
岡原正幸 2013年

『ベースボールを読む』 吉田恭子 2014年

『ダンテ『神曲』における数的構成』 藤谷道夫 2016年

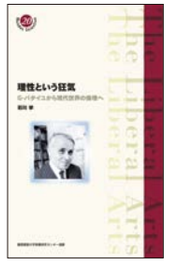
『ペルーの和食 ―やわらかな多文化主義』
柳田利夫 2017年

『ロシア歌物語ひろい読み ―英雄叙事詩、歴史歌謡、道化歌』
熊野谷葉子 2017年



ジョン・ラスキンの労働者教育
―「見る力」の美学
横山千晶 2018年

『修身論』の「天」
―阿部泰蔵の翻訳に隠された真相
ミヤン・マルティン, アルベルト 2019年



理性という狂気
―G・バタイユから現代世界の倫理へ
石川学 2020年

コミュニティと芸術
―パンデミック時代に考える創造力
横山千晶 2021年

『ダフニスとクロエー』の世界像
―古代ギリシアの恋物語
中谷彩一郎 2022年

〈選書刊行記念企画〉「著書と読む教養研究センター選書」

「著書と読む教養研究センター選書」は「教養研究センター選書」をより広く知ってもらうことを目的とした企画です。2020年度に第1回、2021年度に第2回が行われました。

第2回　コミュニティと芸術　パンデミック時代に考える創造力（横山千晶）（2022年1月14日開催）

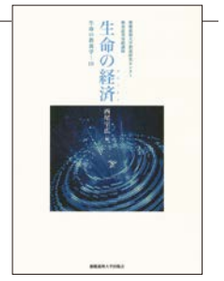
第2回の様子

書籍

「生命の教養学」の授業をまとめた「生命の教養学」シリーズの他、教養研究センター監修の書籍も随時刊行しています。

『感染る
生命の教養学14』
赤江雄一・高橋宣也 編 2019年

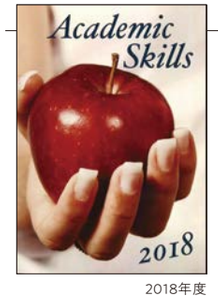
『組織としての生命
生命の教養学15』
荒金直人 編 2019年



『生命の経済
生命の教養学16』
西尾宇広 編 2020年

学生論文集

「アカデミック・スキルズ」で執筆された学生論文は、2005年以降毎年、学生自身で編集し一冊の本にまとめられ、『アカデミック・スキルズ学生論文集』として刊行しています。



2018年度

2019年度

2020年度